

幼児集団におけるグループ・ダイナミックス

中野 繁 喜

Ⅰ 集 団

ある書物に「人」と「人間」とについて述べてあった。英語でもそういう両方の表現の仕方があるが、たしかに私たちは「子」という元米数と「子ども」という元米複数とを同じように使用している。

私がお引き受けたのは「幼児集団」である。一般に、誕生前後までを「乳児」それ以後小学校入学までを「幼児」小学校時代を「児童」と呼びならわしている。幼児の幅が広いので、ここでは幼稚園児の年令を中心に考えていくことにする。実は後述するように、幼稚園児、すなわち幼児後期にならなければ「集団」の中の生活にはならないのである。「子ども」ということばのもつニュアンスは、幼児や児童においてピッタリするようである。

さて「集団」ということばは、どのように定義されているであろうか。集団とは、

1 一定の場所または地域に人々が集り（行動空間）

2 その人々の集りは一定の時間持続し（継続時間）

3 ある共通の目標に向かい（行動目標）

4 その目標を指向する行動を、成員の間で一つの組織を編成し、お互いの役割とそれに応じた地位をきめ（組織関係）

5 その成員の間に、相互に要求・思想・感情を交換交流するシステムをもち（コミュニケーション）

6 そこで成員の間に、愛情・親疎などの心理関係が生れるという条件が満足された場合である。

私たち人間がなぜ集団生活をするかについては、多くの説明がなされている。集団になぜ所属しようとするかという（家族とか学級などの非自発的集団は一応カッコに入れて）一つには集団の中で「基本的要求」を満足させることができるからである。

註

人間の行動を絶えず推進するものとして、いいかえれば、生活力の動力源として、私たちは「人間としての基本的要求」をもっており、これらの「要求」は四六時中、生起し、消滅し沈黙していません。

人格的要求		生物学的要求	基本的第一次的要求	第二次的要求
自我的要求	愛情・集團所屬・社会的承認・独立 ・自己成就・安定感の要求など	食欲・渴欲・呼吸欲・睡眠欲・排泄欲・苦痛回避適温など		性欲・母性愛・母性的行動への要求
社会的要求	共感・同情・愛護・協力・分担などの要求			攻撃・競争・所有・収集などの要求
				友愛・尊敬・奉仕などの要求

子どもの生活行動を推進する基本的要求は、人間生活になじんでいく過程で、周囲の影響と制約をうけながら、諸要求を自己統制していく方法を学びとっていくし、生物学的要求より人格的要求を優先させるようになり、段々と人間らしくなってくる。従って、生活年令がふえるにつれて、「要求」の種類や強さが変化し、「要求」を貫徹する方法なり表現の仕方も変化し発達する。

△2 幼児の心理的特性 —特に社会的行動の発達からみて▽

幼児は、その発達の段階からいって、集團生活に対するレディネスができているであろうか。相互に影響しあう集團活動が十分にできるであろうか。社会的行動の発達ということに重心をおいて、幼児の心理的特性を考察してみよう。

1 質 問

幼児期は「質問期」ともいわれるほど、質問に悩まされる時期である。これは、従来家族内に限られていた生活空間が、家庭を離れて近隣に幼稚園にゆくことによって、急激に拡大されてくる。家族集團の中で、一応安定していた心的構造メンタルセット（生活のかまえ）が、わか

らないことや不思議なことに出合って、行動環境が不均衡になり、心的構造が力学的に不安定になる。このため、均衡のとれた状態にもどそうとするための行動として「質問」という形をもとめる。かくて、ことばの数が急激に増加し、生活空間の認知が深められてくる。

2 模 倣

やはり「模倣期」と名づける学者もいるが、極言すれば「模倣」は子どもの集團生活の第一歩であるといえよう。模倣によって、子どもは他の人々との共通の広場をもつことになる。三才前後からかなり積極的に同輩を求め、近所に相手があると毎日その子どもと遊ぶようになる。そして、相互に行動をまねあい、現実に体的に同じような言動的表出を行なうことによって、他の子どもとの同一化が起り、心的構造も均衡をえることになる。「同一化」は集團活動の必要条件である。

3 反 抗

幼児期は、青年期とともに、人生における反抗期である。反抗の発生は、自我の確立に伴なうといわれる（その確立、発生は、人によって遅速があるが）。幼児は、その断片的な構造の環境から、質問をしたり模倣をすることによって、生活空間の認知を深め、自分の環境を再構造化しているのである。すなわち、その生活環境の中にある断片的なものが、幼児自身に対して、一定の構造（その中核として「自我」を形成する）の下に、整理しなおされてくる。そして、そ

の組織化構造化された環境に対して、幼児は自己の心的構造も再組織化しようとしている。換言すれば、自我が発生し確立してくるのである。

自我が確立すると、子どもは子どもなりの意図によって行動をしかくなる。「第一の完成期」(五才)といわれるほど、言動が危げなくなってくるからである。けれども、ややもすると周囲の人々はまだまだ「ネンネ」だとして取り扱う。すると、理由を十分に述べなくてもスネるという直接行動をとることになる。そして、一人前としての自分の存在を、相手に認識させる手とり早い方法が「反抗」という手段である。

従って、反抗する子どもは、社会適応能力の発達という点からいって、ノーマルに健全な発達をしているといえよう。ただ、一定の社会的な場の中で、具体的に一定の位置についており、一定の役割が与えられて、その心的構造が安定している場合には、人は反抗しない。その意味から、子どもが質問し模倣する同一化行動は、反抗することと表裏一体をなしているのであって「模倣しながら反抗しながら」という過程を経て、子どもは社会生活の適応能力を次第に身につけてくるのである。

註 「反抗」は、「環境の再認知のために起る環境の再構造化」と、それに伴う「自我の確立」が必要な条件となる。青年期の反抗も原則的には同じ原理に従っている。また一部の人によって、小学校三・四年を第二反抗期とされているのも、小学校生活への慣れからくる環境認知の消化・再構造化と自己主張とがあるからであろう。

4 仲間遊びと喧嘩

幼児のも一つの特徴は「仲間遊び」の発達である。しかし、幼児集団における仲間遊びは、結びつきは極めて弱く、離合集散が頻繁である。更に、力関係が極めて不安定で、そのため喧嘩が多いという点が目立つ。ピアジェは、遊びを道徳的発達と関連させて、次の三段階に分けている。

(1) 二・三才頃。規則を殆んど理解できず、従って規則を義務的なものと考えない。「お友だち」と周囲の人はそう呼んでいるが)と一しよに遊びたがっても、てんでんバラバラに自分勝手に遊んでいる。いわゆる「平行遊び」で、共通の心理的場のもち方が弱い。だから、たとえ幼児集団の中においても、全くのアブラムシである。しかし、それで本人は十分に楽しんでいる。

(2) 四、五才以後。成人や年長児の規則をそのまま絶対視し、それを模倣して行動するようになる。この規則に従うことができるということは、集団の一員としての生活が可能になってきたことである。またこの頃は「っこ遊び」(役割遊び)をよく行なうが、それぞれの役割を演ずるためには、一定の規則に従わなければならない。ところが、幼児はまだまだ自己中心性があり、自己優越の主張・物の独占・能力の比較などに競争意識をもっているもので、当然遊びの中に「喧嘩」が多くなる。幼児の喧嘩の原因は、

① 身体的障害(なぐった、おし倒したなど)

② 遊具の所有や独占によるもの

- ③ いい役割をえようとすると争い
 ④ 不正に対する抗議（規則を守らないなど）
 ⑤ 人格的阻害（悪口、蔑視など）

幼児の喧嘩は、相互の自己中心性の衝突であることが多い。他者をよく知らないからである。従って、喧嘩によって、腕力なり知力によって力関係ができると一応落着くもの、幼児集団の力関係は極めて不安定である。しかし、喧嘩によって次第に自己中心性を卒業し、協同する能力をもつようになるのであるから、奨励すべきものではないが、一度はくぐらねばならない関門である。

(8) 八、九才以後。規則は他律的強制的なものではなく、子ども間相互の協定によって、変更され守られるようになる。幼児の友だちの要因には、親の関係・地理的關係が支配的であって、性格的要因による結びつきではない。勿論、性格的要因が入りこんだ仲間遊びをする能力も十分でないし、また性格的要因をそれほど必要ともしない。しかし、小学校も中学年に達すると、友人の選択が始り、次第に高度の一体感をもつ仲間集団（ギャング集団と呼ばれる）を作り、その集団は、前に掲げた「集団」であるための六項目の条件を十分に満足させるものとなってくる。幼児期においては、実は本当の集団生活は持てないのである。

以上、幼児の心理的特性を、集団生活能力に重心をおいて展望したのであるが、この展望の中から、幼児の集団生活に対するレディ

ネスの程度（幼児の集団生活への適応力の発達過程）と、幼児集団の集団活動の限界とを汲みとっていただけると冀う。

△ 3 V

小学校の教育目標の中に「……人間相互の關係について正しい理解と協同、自主及び自律の精神を養う」（学校教育法）とあり、幼稚園の目標の中には「2、園内において集団生活を経験させ喜ぶこと」及び「3、身辺の社会生活及び事象に対する正しい理解と態度の芽生えを養うこと」とある。幼稚園の集団指導で心することは、この「芽生え」である。

さて、健全な集団生活の芽生えを養うためには、どうすればよいであろうか。人間関係の中における「基本的要求」の正しい表現の仕方、正しい貫徹の方法を指導すること、或いはまた、子どもの集団生活適応力の発達に即して、遊びの指導に当らねばならないであろう。一定の規則を追う遊び、模倣や想像による遊び、協力してやる競争遊び、厳密な規則をもつ遊びなどは、芽生えを促進し、生活の深化を促すものであろう。また、松村康平氏や外林大作氏などによってその研究成果をあげられている「心理劇」や「ロール・プレイング」なども、幼児の環境認知の能力を深め、自己中心性を脱却させ、幼児集団の正しい成長と発達とを推進するものである。

（九州大学）